

地域教育学としての社会認識教育（２）

日野ボランティアネットワークの活動の検討を通して

小山直樹*

Social-Cognition Education for Regional-Pedagogy(2) - a Study of Hino-Volunteer Network Action -

KOYAMA Naoki*

キーワード：日野ボランティアネットワーク

Key Words：Hino-Volunteer Network

１．はじめに - 研究課題の所在と分析視点・分析対象 -

拙稿「地域教育学としての社会認識教育（１）」において、筆者は鈴木正気氏による1970年代の一連の社会科実践を、とりわけ「広義の社会認識教育」を「狭義の社会認識教育」に規定されたケースとして分析し、地域教育学の教育原理と求められるキー・パーソン像の一端を解明した。

本稿は引き続き地域教育学の教育原理と求められるキー・パーソン像の解明を目指すものである。具体的には、2000年10月6日に発生した鳥取県西部地震に即応して立ち上がった鳥取県日野郡日野町災害ボランティアセンター（以下、「災害ボラ」等と略記する）の活動と、2001年4月14日に並行して立ち上がった日野ボランティアネットワーク（以後、愛称である「ひのぼらねっと」と略記する）の活動を取り上げる。（注1）

分析視点としては「災害ボラ」及び「ひのぼらねっと」に参集する町内外のボランティアが過去5年間の災害復旧活動や高齢者誕生月プレゼント企画等を通して自らのボランティア活動意識や認識を、とりわけ自他認識をどのように変化させて来たか、なぜ変化させ得たのか、6年目の現在どのような発展方向性を模索しているか、に設定する。前稿にも増してより確かな地域教育学の教育原理と求められるキー・パーソン像を解明するための基礎的作業である。（注2）

２．鳥取県西部地震災害に即応した「災害ボラ」の立ち上げの経緯とコーディネーターの誕生、そして成長

2000年10月6日午後1時30分、マグニチュード7.3の鳥取県西部地震が発生した。最大震度は境港

*鳥取大学地域学部地域教育学科

市と日野郡日野町で6強、負傷者106人、全壊家屋373戸、半壊家屋2341戸、一部破損家屋12107戸(01年1月12日現在)であった。幸いにも死者は無く、火災も発生しなかったが、本稿で取り上げる日野町は高齢化率も高い中山間地の典型であり、家屋の破壊、破損は片山善博鳥取県知事も指摘されたように地域存亡の危機的状況にあった。

救援活動は近隣諸県・府からの応援も受けて延べ人数を示すと以下の通りであった。自衛隊1546人、消防署員・消防団員3908人、ボランティア5351人(うち県外者1900人(ボランティアは1月7日現在、他は1月5日現在))。

なかでも日野町へのボランティア結集ぶりは他の市町村を押し、平成13年6月末現在での県の集計では3594人(うち県外者1674人)であった。ちなみに第二位は西伯町で899人、最少は境港市の89人であった。ボランティアコーディネーター派遣延べ人数も日野町が36日間で416人、西伯町が7日間で86人、米子市が9日間で64人であった。さらには、被災建築物応急危険度判定結果を見ると「危険」435件中日野町が158件、「要注意」1395件中709件であり、いかに日野町の被害が甚大であったのかわかる。

このような状況の中、10月6日夜半には神戸元気村の吉村誠司氏たち先遣隊が入町し、早速、大挙して到着するであろうボランティアの受け入れ態勢の準備に取りかかった。日野町側の窓口になったのは、当時、日野町図書館長であった松田暢子氏であった。多少長くなるが大事な証言であるので引用(震災半年後のフォーラムでの発言から)しておこう。松田氏によれば「とりあえず総務課に詰めて電話の受け付けをしたり被害状況を把握することの手伝いをしていた。10月6日はそのまま役場に泊まり込み、10月7日だったと思うが、お昼ぐらいに上司から、ボランティアに來たいという申し出がたくさん来ているので、これからその受け付けをしてもらえないかと言われた。そのときは、ボランティアに來た人の名簿をつくって、カウンターで受け付けをするぐらいにしか思っていなかった。そのときには、もう既にボランティアが3名ぐらい來られていて、そのうち一人は神戸元気村の方が來ておられて、その方は受け付けはされていたが、もう既に現地に入って活動しておられた。一番被害の大きかった下榎地区に入って、ボランティアセンターをつくって、どんどん仕事を始めておられた。あと高橋さんのお仲間の(米子)RBの方も來てくださっていたし、もう1名、米子からボランティアの方が來ておられた。その方が、これからボランティアが何百人、何千人も來るんですよ、こんなとこじゃとても受け付けはできませんと言われて、どうしたものかなあと思っていたら1枚のメモを渡してくださった。そこには鳥取県社協の電話番号が書いてあり、この番号に電話しなさい、それで助けを呼びなさいと教えられた。(中略)県の社協の方が翌日の早朝には助けに來てくださった」とのことである。災害ボランティアコーディネーターとしてズブの素人である松田氏の姿が読み取れる。松田氏は続けて述べる。「10月8日にボランティアの受け付けを始めたが、最初、全国からどれぐらい來られるかわからなくて、とても役場の前の駐車場では入らないし、受け付けもできないということで、広い駐車場のある根雨高校のグラウンドを借りて、そこで机を出して、車もとめれるようにして、受け付けをした。一番最初の日には100人ぐらいだったと思うが、ボランティアの方が來てくださって、すぐに自衛隊の方とか、町の消防団と一緒に、屋根のシート張りとか瓦れき処理であるとか、もう雨が降りそうだったので、すぐそういう仕事に回ってくださった。その後、町の文化センター(役場横、図書館と同一の建物)の中にボランティアセンターを置くことにした。(中略)ホールは使えないけどロビーというロビーはとりあえず使えた。そのロビーと事務室の小さい部屋を使ってボランティアセンターを立ち上げることができた。それから県社協から派遣された県内の社協の職員と、それから中国ブロック、

近畿ブロック、阪神・淡路の大震災を経験したとて経験豊かなボランティアコーディネーターの皆さんが1日15人から20人ぐらい来られたと思うが、ローテーションを組んで三、四日ずつ泊まり込みでロビーの床に毛布を敷いて寝て、ボランティアコーディネーター業務に携わってくださった。私は、その仕事を見ているだけで、お手伝いしながらお任せしているという状況で、このようにボランティアというものはコーディネートをして仕事をしてもらうものなんだなあと、何か目の前で見ていて、とてもカルチャーショックというか、新しい発見をしたと思っている。だから、いろんなボランティアの方も来られたし、コーディネーターという言葉は知っていたが、ボランティアを動かすにはコーディネーターが必要だということを本当にその時感じた。（中略）あと、コーディネーターの方たちとともに、神戸のボランティアの吉川さんが情報処理でずっと1カ月以上も泊まり込んで、一緒に活動もしてくださった。本当にそういう方たちがおられなかったら、ボランティアセンターというのは、多分機能していないのではないかと知っている」と。吉川理子氏は「コーディネータのさらに後方支援というような位置で活動」し、「毎日の活動状況の報告、あとはボランティア活動ニュースの発行等」を担った。

このような取り組み状況に対して牛田昭鳥取県社会福祉協議会ボランティアセンター所長は「11月6日から3名の方を臨時雇用職員として置いていただいた。とりあえず3月31日まで、元町社協の職員で以前は役場の職員だった方（西村行認氏）をリーダーとして、40代の元保母の方（加藤則子氏）、もう1人、二十歳ちょっとの若いお嬢さん（徳山智美氏）と、3名の方を雇っていただいた。吉川さんがされていた情報整理と、当然窓口に来るボランティアの調整業務、コーディネート業務をやるということで、1週間は引き継ぎ期間として私どもがその3名の方と一緒にやっていたが、もともと訓練を受けている我々と、臨時に急遽お願いした方とでは、やっぱりちょっと対応のレベルが違う部分があって、今現在もなかなか大変苦労されているようだ。折々に触れては我々もご相談に乗ったりしているが、どちらかという地元の松田さんにほとんどおんぶにだっこ状態に今現在なっているのではないかと感じている」と言う。

確かに松田氏に大きな負担をかけていたのは事実（休日も返上）であったが、松田氏の思いは先を捉えていた。松田氏は言う。「今、日野町のボランティアセンターとして一番問題というか、課題になっているのが、今後の災害ボランティアセンターをどうやっていくかということである。このフォーラムは、もう一応区切りしたから、今回の震災についてもう1回振り返ろうという形かもしれないが、日野町の災害ボランティアセンターはまだ終わっていない。それで、私もこのフォーラムのパネラー紹介のところには、現在もボランティアセンター運営スタッフとして従事というようになったいるが、実はもう11月15日で災害対策本部から復興本部に変わっていて、もう私のいるところは本当はないわけである、だから、もう本来の業務に戻っていて、図書館の仕事をし、またホールの復興イベントをいろいろやっているけれども、そういう仕事もう既に入っている状況である。だから、そういう状況の中でどうやって災害ボランティアセンターを町として引き継いでいくか。今、町のボランティアセンターというのがもともとなかったが、それをどうやって立ち上げて、地元の町のボランティアを育てていくかということがとても課題だと思っている。（中略）いろんなボランティア団体が町内にもあることはあるが、それをどうやってつなげていってネットワーク化していくかということが今後の課題になると思う」と。

震災半年後の時点で、松田氏は災害ボランティアセンターを日野町として継続させていくことの重要性と、やがて「ひのぼらねっと」に合流するのであるが既にこの時点で町内各種のボランティア団体のネットワーク化の方向性を考えていた。その意味では松田氏は早くもボランティアコー

ディネーターとして歩み始めたと言える。

松田発言を受けた次の吉川発言、牛田発言も傾聴に値しよう。吉川氏は「もう地元の手に移す時期である。私も11月の後半に神戸の方に戻るときに、私はもう二度と来ない、皆さんでやってください。もし今後私が来るとしたら、それは単に一般の作業ボランティアとして来るからよろしくと言い置いたが、私はいまだに運営の方にまで口を出す小姑のような状態になっている。それは一重にボランティアセンターの今後が、松田館長がおっしゃったように、まだ不明確な状態にあるというのもあるが、ちょっと人材の方に不安というか、スタッフの方に行動力とか企画力、そういうものが要求される時期なんじゃないだろうかと思う」と。牛田氏は「はっきり言うと鳥取県でボランティア活動というのは実際は根づいていない。個々の住民の皆さんが何らかの意味でだれかの支援を必要とするときに、素直に手を挙げて、だれかに助けてと言えない県民環境である。(中略) 社協のボランティアセンター、コーディネーターが何をやってるか、食事サービスグループのお世話やイベントの企画、それに終始しております」と。

3. 「ききとりニーズ調査」

「スタッフ(コーディネーター)の行動力、企画力」を高めようと考えていたのは吉川氏や松田氏だけではなかった。鹿児島からの旅行中、米子市で震災に遭遇し日野町に駆けつけた山下弘彦氏は、当初は災害復旧ボランティアとして活動を続けていたが、日野町に居住しながら数年先までの復興プロジェクトの立ち上げも考えていたのである。そのための基礎的資料を収集するために「ききとりニーズ調査」を企画し、実施したのであった。調査報告書(日野町災害ボランティアセンター 2001年4月6日 全39頁)の要点を以下に紹介しよう。

< > 調査の全体像

【ききとり調査の規模】

一人暮らし高齢者世帯(65歳以上)	134件(完了)
高齢者世帯(70歳以上だけで居住、を原則)	139件(完了)
仮設住宅居住世帯(すべて)	26件(完了)
	合計 299件(完了)

今回の調査による、日野町内での接触率

*世帯数: 299戸・・・日野町全戸の2割弱(全世帯数1572戸)

*接触人数: 464人・・・日野町全人口の約1割(日野町全人口4591人)

調査参加ボランティア数

*実人数72人(のべ138人) 町内: 22人(のべ40人)

町外50人(のべ98人)

【ききとり調査 全体の概要】

*年末以来、ボランティアセンターへの依頼件数は落ち着いてきていたが、町内での状況を見ると、ボランティア活動の必要性が薄れてきたとは考えにくい。また、阪神・淡路大震災後の住民状況から、数ヵ月を経て顕在化してくる精神的なダメージなども想定される。このため、3月までのボランティアセンターの活動として、町民からの依頼を待つだけでなく、ボランティアで支援できるニーズをこちらから聞きに行く必

要があると考えた。

- * すぐに対応出来るニーズの把握と併せて、新年度ボランティアセンターの設置に向けて、活動指針・活動内容を定めていくために行った調査である。
- * 今回の調査では、震災を経験した日野町民が今、どんなことに困っているのか、ありのままの状況を吸い上げることを主旨とした。
- * 10月の震災直後、「困っていることはないか」「ボランティアにできることはないか」という聞き方で訪問調査を行っているが、明らかに支援が必要な状況でも口をつぐまれる傾向にある、との反省が残されている。これを踏まえて、今回の調査では健康・食事などの生活についてうかがう（色々と話をする）中で、地震による影響や困りごとなど被災後の生活全般を把握出来るようにした。
- * 今回の調査では、ボランティアセンターの優先課題を見出していくために、町民の中でも特に優先的な「支援」対象となる、高齢者（一人暮らし、およびそれ以外の高齢者世帯）を対象とした。
- * 仮設住宅居住者には特有の困りごともあると考えられる。このため、仮設住宅世帯のみの調査項目も設定し、仮設住宅については、全員が高齢者の世帯に限らず、全世帯を調査した。
- * 調査に当たっては、課題の解決をボランティアセンターが手がけるか、どうかは別として、困っていることが洗いざらい把握できるように努めた。
- * 高齢者を支援するという観点では、継続的に関係を持つことが必要。この意味で、今回の調査は予備調査と位置付ける。

【ききとり調査の生かしかた】(省略)

< > 調査実施概要

【調査方法】

調査票をベースにした訪問ききとり調査

定量調査の体裁をとった定性調査である。

民生委員・近隣の方に同行していただくか、センターから訪問先に連絡をするかして、ボランティアが調査員となるやり方を基本とした。

【調査対象者】(【ききとり調査の規模】の項と重複するので省略)

【主な調査期間】

- 1, 一人暮らし高齢者世帯調査
主な調査期間：2001年2月17日～2月28日
- 2, 高齢者世帯調査
主な調査期間：2001年3月3日～3月14日
- 3, 仮設住宅居住世帯調査
主な調査期間：2001年2月27日～3月6日

< > 調査結果

【調査対象別の特徴】

一人暮らし高齢者世帯

* 健康である場合

自分でできることはやる」「人の世話にはならない」という気持ちで、一人での暮らしを支えている。自分が健康ではなくなった場合にはどうするかなど、共通して先々への不安を抱える。

* 足が悪い、持病があるなど健康に問題がある場合

近隣に家族や親戚、その他頼りにできる存在があるかどうかで差があるが、誰かを頼りにできる場合でも、気兼ねなく世話を頼める人は少ない。また、頼りの存在がない場合、買い物・通院や食事などから、かなり不便な生活をしている人が多い。

高齢者世帯

* 同居者のいずれもが健康である場合

夫婦、兄弟、親子など、同居者同士で生活する上での役割を分担したり、精神的な支えとするなどお互いを頼りにして生活が成り立っている場合が多い。同居者にもしものことがあった場合の自分自身の不安、自分にもしものことがあった場合の同居者への心配など、先々への不安を抱える場合が多い。

* 同居者のいずれか、またはそれぞれが健康に問題がある場合

同居者の世話が必要であるため、よけいに生活が大変な場合がある。同居者にもしものことがあった場合など、急激に精神的な負荷がかかることが懸念される。

仮設住宅居住世帯(省略)

[1 今後求められている活動領域～調査結果～]

不安の解消(安心感)と精神的なケア

ふだんからの話し相手

精神的なケア

いざというときの頼り: 相談相手, 緊急通報用電話

困りごとの解決

力仕事, 交通手段の代替など, 高齢者だけではできない困りごとの解決

解決するための手立ての案内

問題を抱える世帯の支援

交流の場・機会づくり

同世代同士で、あるいは世代を超えての地域での交流の場や機会づくり(送迎も考慮して)

生きがいづくり

「何か人の役にたたい」気持ちに応える場・機会づくり

趣味に打ち込んだり、経験を生かしたりできる場・機会づくり

[2 今後求められている活動領域～調査結果～](省略)

[3 今後の活動を裏付ける現在の状況](省略)

< > 困りごと一覧(65項目 省略)

< > 今後の課題

老々介護をはじめとした、高齢者世帯の支援

各種情報や手続きが必要な用件などが、「知られる」(「知らせる」)、「伝わる」(「伝える」)仕組みづくり

「ボランティアセンター」「ボランティア活動」の認知・受け入れ

ボランティアの育成（育成のしくみづくり）

「いざというときの頼り」の要望は高い

調査に行ったボランティアからの報告（所感）（省略）

一人暮らし老人世帯調査：単純集計（省略）

4. 「ききとりニーズ調査」から見えてきたもの

「ききとりニーズ調査」から見えてきたことは以下の3点に集約できる。約400人に上る70歳以上の独居高齢者、夫婦世帯の方々は自分に対して厳しいという自立心が強く、口ではボランティアを含めて他人に迷惑をかけてはいけないと語るが、健康不安を軸に多様な不安や要求を持ち、対人関係も深めたいと思っている方も多い、災害復旧ボランティアの力を受け入れた高齢者ほど「恩返しをしたい」「何か、誰かの役に立ちたい」という気持ちが強く、自分なりの持ち味を活かせる出番を待ち望んでいる、ボランティアをする側は受ける側の目線に立ち、少なくとも対等・平等の関係であることを自覚し、受ける側の対応ぶりの差違をその方の個性だと捉え、「個性を持ち味に、持ち味に出番を」（太田堯氏の言葉を引用）用意する配慮が求められる、ということである。

5. 「災害ボラ」から「ひのぼらねっと」の立ち上げへ（中山間地高齢化地域型ボランティアの開始・高齢者誕生月プレゼント企画の開始）^(注3)

2000年12月23日、震災被害が大きかった下榎と餅つきボランティアグループがいる久住で餅つきを行い、町内高齢者世帯へ配布した。餅米は島根県浜田市のボランティア団体・浜田ボランティア村が寄贈してくれた。思いがけないプレゼントに大変喜んでもらった。単に餅をもらったという喜びだけではなく自分たちのことを気にかけて訪問してもらえた喜びでもあったのではないかと山下氏は回想している。

この体験も活かして松田氏や山下氏、米子市から連日駆け付けて修復作業に努めた渡辺大吉氏、ホームページの立ち上げに努めた山垣浩功日野産業高校教員（現・境高校）、学生ボランティアと共に日野通いをした井上厚史島根県立大学教員などの「災害ボラ」の中心メンバー、米子市の会社員中島正司氏、当時大学院生で米子市出身の角俊一氏（現・島根県職員）、さらには多くの地元女性ボランティアが一堂に会して「ひのぼらねっと」を2001年4月14日に立ち上げたのである。「震災を契機に育ったボランティア精神を町に根づかせ、住みよい町づくりにいかしていこう」と呼びかけ、民間による自主的な組織「日野ボランティア・ネットワーク」（ひのぼらねっと）が発足したのである。発会式には町外からのボランティアや自然保護などの分野で活動している団体に所属する町民ら、高校生から高齢者まで50人が参加した。会では設立主旨として以下の4点が確認された。

（災害ボランティア）センターの活動を支援していくこと、ボランティアの緩やかなきずなをつくること、町内にボランティアの輪を広げること、町外ボランティアとのつながりを生かして情報交換をしていくこと、である。そしてすぐに、広報誌「ひのぼらねっと通信」発行の検討を開始した。上記を果たすためだった。

体制づくりも進められた。6月の定例会で、代表に小谷博徳日野産業高校教員（現・日野町議）が、事務局長に松田氏が就任し、事務局担当には「ひのぼらねっと」発足にかかわってきた町内外のボランティアが名を連ねた。

一方、日野町災害ボランティアセンターは2001年4月、所在地を根雨から黒坂へ移し、臨時職員
の山根靖代氏らの地道な呼びかけで住民からの要請を受け付け、ボランティア活動を続けていた。
この後、臨時職員には宮本久氏、山田利美氏（名称から「災害」の二文字が消えて日野町ボランティ
アセンターに改称）が就任し、活動の質量も次第に変化したが見え続けている。

再び「ひのぼらねっと」の活動に戻ろう。2002年4月から始まる高齢者誕生月プレゼント企画に
至るまでの活動は以下の通りである。

- * 町（災害ボランティアセンターの活動支援）
- * [元気を出そうよ、ひの星まつり]（2001年8月、2002年8月は有志で協力）
- * 県西部地震から1年 [ボランティア・サロン] 開設（2001年10月）
- * [年末餅つきイベント] 実施・高齢者世帯への配布（2001年12月）
- * [アフガンヘサッカーボールを届けよう] 廃品回収と募金（2002年6月有志参加）
- * 町震災2周年で炊き出しイベント（2002年10月）
- * [おしどり荘訪問] ~ホットケーキ作りとお手玉など~（2003年3月）
- * [ひのぼらねっと通信] の発行
- * [ボランティアセンター&ひのぼらねっとホームページ] 運営
- * [地震に負けるな ボランティア奮闘記] 朝日新聞連載

高齢者誕生月プレゼント企画が生まれる経緯は「高齢者誕生祝い企画（案）」（2002/03/09日野
ボランティア・ネットワーク例会資料）が詳しく述べている。大事な資料なのでそのまま採録して
おこう。

【目的】

1) 高齢者世帯の訪問企画として

年末に実施した町内高齢者世帯への餅配り（久住・下榎両地区での餅つき大会）では、ちょうど
餅つきをしていた世帯なども含めて、思いがけぬプレゼントに大変喜んでもらった。高齢者世帯に
とっては、餅をもらったことだけではなく、自分たちのことを気にかけて訪問してもらえたこと自
体がうれしかったと考えられる。また、一人暮らし、あるいは高齢者だけの世帯では、誕生日など
にも祝ってもらえる機会は少ないと考えられるので、誕生月にお祝いをする（プレゼントを持って
訪問する、あるいはイベントを行う）ことで、高齢者が元気付けられる企画とする。

2) ニーズ調査後の後追いの訪問企画

昨年2～3月にニーズ調査（高齢者世帯ききとり調査）を実施して、高齢者世帯が抱える困りご
となどがいくらか把握でき、訪問活動そのものにも意味があることがわかっている。また調査に行っ
たボランティアにとっても、訪問世帯の調査後の状況が気にかかるという声が多くあるため、訪問
時に困っていたことが最近はどうか、今困っていることはないかを、聞いてくる。聞き取ってきた
内容に関しては、ボランティアセンターの活動で対応したり、できる限り公的なサービスなどとな
げたりすることで、問題を解決する。

3) ボランティア（ボランティアセンター）の広報的活動

地震発生後には、ボランティアセンターに依頼するなど、世帯の中では解決し切れない困りごと

にボランティアの助けをもらった人でも、最近ではセンターが存在し、活動していることを知っていない人もある状況である。このため、「困ったことがあればボランティアセンターへ連絡してください」という内容をプレゼントなどとともに渡してボランティアセンターの認知を高め、手助けが必要な人にすぐに助けを求められるようにする。

4) 町内ボランティア活動の推進

町の長期計画などでは、町内のボランティア活動を推進する動きがある。また震災後、町内で自分でも何かやりたい、という声を耳にするようになってきている。このため、町内団体とも協力し合って多くの人に関われる企画を実施することで、日野町でボランティアが横の連携をとりながら、充実した活動ができるようにしていく。その中には、団体に属さない個人や、学校週5日制で対応が検討されている小学生・中学生・高校生も関わられるようにする。

【対象者】

町内に住む高齢者

<案1> 昨年のニーズ調査対象者（年齢は調査時）：約450人

一人暮らしの65歳以上の高齢者世帯

70歳以上の高齢者だけで住む世帯

<案2> 昨年のニーズ調査対象者の一部（年齢は調査時）

一人暮らしを含む、70歳以上の高齢者世帯

<案3> 敬老会対象者：約700人

75歳以上の高齢者すべて（高齢者のみの世帯であるかどうかは問わない）

<案4> 敬老会対象者の一部：約400人

75歳以上の高齢者のうち、高齢者のみの世帯

【実施概要】

1) 実施内容

その月に誕生日を迎える高齢者の家を訪問して、誕生日プレゼントを渡す。

最近困っていることなどを聞いてきて、必要に応じてその後のサポートをする。

2) 実施日

毎月第2土曜日

午前中：プレゼントの準備（事前準備が必要なものは別途）

午後：高齢者世帯訪問配布

夜：ひのぼらねっと例会で当月の状況確認会

3) 実施期間

2002年4月～2003年3月の1年間

翌年度の実施については、1年間の実施状況によって決定する。

4) 実施方法

プレゼントの準備

(1) カード（基本仕様は毎月共通）

ボランティアセンターの連絡先、主催（協力団体他ボランティア）印刷

「さん、たんじょうびおめでとうございます」の手書き

貼り絵・折り紙貼り付け, 本人撮影写真など

(2) 各月のプレゼント

月ごとに設定したプレゼントを各団体との協力で用意

(場合によっては, 食事会などのイベント的なプレゼントの場合もある)

初年度は実験的な意味合いも考え, 各月で様々なプレゼントメニューをやってみて反応を聞く。

5) 訪問配布

町内をいくつかの集落で大きく区分。各集落の訪問・配布担当を数人決めて, 毎月の配布は原則的にその担当間で調整して行う。月によっては, 大学生や高校生など, 各地区の担当者とともに訪問を行う。

6) 資金

寄付金や会費など, 自己財源のほかに, 鳥取県共同募金会の配分申請をする。

このような企画案が例会で吟味・検討され, その結果, 2002年度1年間は70歳以上だけで暮らす高齢者を対象にしてスタートした。対象者は約450名(月平均35人程度), 1年間のボランティア参加者は延べ494人(41人/月)であった。

毎月の手作りプレゼント内容と協力ボランティア団体であるが, 4月「ぼたもち(萌会)」、5月「赤飯(食生活改善推進協議会)」、6月「笹もち(明るい食生活黒坂グループ)」、7月「手作り写真入れ(根雨二区悠々会女性委員会)」、8月「手作りクッキー(おしどり作業所)」、9月「手作り月見だんご(奥渡子ども会)」、10月「動物組み木(木のおもちゃづくり)」、11月「フラワーアレンジメント(生田清子氏)」、12月「もち(久住寿来の会)」、1月「赤飯(菅福元気村)」、2月「大山おこわ(有志の皆さん)」、3月「中国風菓子(岩瀬益子さん)」であった。

6. 小学生から高齢者までのボランティア活動に対するの意識変化と成長

高齢者誕生月プレゼント企画は2003年度, 2004年度, 2005年度, 2006年度も継続中である。例えば, 4月「春のおすし(萌会)」、5月「さくら餅(日赤奉仕団)」、6月「柏餅(明るい食生活黒坂グループ)」、7月「山菜おこわ(食生活改善推進協議会)」、8月「手作り団扇(悠々会)」、9月「フラワーアレンジメント(生田清子氏)」、10月「利休白玉だんご(中国電力)」、11月「山菜おこわ(黒坂有志)」、12月「クリスマス組み木(木のおもちゃづくり)」、1月「いちご大福(木下広子氏)」、2月「いただき(坂本心美氏)」、3月「かきもち(菅福元気村)」、4月「いちご大福(木下広子氏)」、5月「手作り保険証入れ(根雨二区悠々会)」といった具合である。

高齢者誕生月プレゼント企画への反応ぶり, 及び考え方やとらえ方は「ひのぼらねっと通信(「誕生日お祝い倶楽部」=ひのぼらねっと通信特別版を含む)が詳しい。以下に紹介しよう。

まず, 届ける側であるが, 子どもたちには大方, 次のような感じ方, とらえ方が多い。5名の声を見てみよう。(2003年6月発行の「ひのぼらねっと通信VOL.15」より。傍点は筆者が付した。その意味は後述する。)

<入って良かったボランティア 根雨小5年 安達瑞華>

わたしの, ボランティアに入るきっかけは, 「ボランティアをしてみない?」と, 母に聞かれた

からです。平成十四年四月十三日土曜日に、わたしはボランティアに入りました。その日、わたしは午後だけで、配るのをしました。ほとんど母が聞いたりしたので、ちょっとひまでした。公民館で、五分ぐらいしたらすぐ帰って、あまり楽しくなかったです。でも、やっていくうちに、いろんなことが体験できて良かったです。フラワーアレンジメントをやったり、おはぎやおだんごを作ったりしました。毎回、カード作りもしました。それを、お年よりの方にわたしました。おじいさんや、おばあさんに喜んでもらえて、うれしかったです。長生きしておられる方もいたので、すごいなと思いました。これからも、元気で楽しく、生活してほしいです。友達や、いろんな人と遊んだり、活動したりして、楽しかったし、いい経験になりました。これからも、続けていきたいと思っています。

<ボランティア活動に参加して 黒坂小5年 梅林真美>

私は、平成十四年の四月から今まで、毎月ボランティアに参加しています。初めは、「めんどくさいなあ。」と思いながらやっていました。でも、毎月、ボランティアをやっていくうちに、だんだん楽しくなってきました。今でも、少しめんどくさいと思うときもありますが、ボランティアをやる友達がいっぱいできてうれしいです。その他にも、プレゼントにするものを作るのが楽しいし、準備してくださる昼食は、いつもおいしいです。プレゼント配りをする時は、町内でも、まだ、行ったことのない所に行けるので、楽しいです。でも、高れい者の方にプレゼントをわたしたり、状況を聞いたりするのは、正直いって、はずかしいです。みなさんは、ボランティアをめんどくさいことだと思っているかもしれないけど、やってみると楽しいものです。だから、どんどんボランティアに参加してみてください。

<ボランティアをして思ったこと 根雨小5年 音田光一>

ぼくが、ボランティアを知ったのは、家の人にすすめられたからです。それで参加しました。ボランティアの時は、みんなで作った手作りのおたん生日カードとプレゼントを持ってお年よりだけの家にとどけます。とどける時は、きんちょうしてなかなか話ができない時もあります。いっしょに行く大人とお年よりの話を聞いていて、足がいたい時や体のぐあいが悪いと聞いた時は、たいへんだなあと思います。でもプレゼントをわたして、ありがとうございますと言われると、とてもうれしいです。二人ぐらしの家はいつまでも仲よくくらしてほしいし、一人ぐらしの家はいつまでも元気でくらしてほしいです。ボランティアをして元気がでる話も聞いたし考えさせられる話も聞きました。いろいろな人と出会えて仲よくなれてよかったです。これからもお年よりの人を大切にしていきたいです。

<ボランティア活動を続けてきて 黒坂小5年 森 紗智子>

私は、去年の四月から一年間ボランティア活動を続けてきました。ボランティア活動の内容は、お年寄りのお誕生月に手作りカードとプレゼントをもって訪問しに行き、それを渡して、地震後、困っていることはないかなどを聞きます。そして、それをボランティアセンターの人に報告することです。私は、一年間やってきて、プレゼントを渡して、お礼をいわれるととてもうれしいし、日野町のいろんな場所を覚えられてとても勉強になりました。それに、ひのぼらねっこの活動とはちがいますが、この前台風が来た時に、ビニールトンネルが道路に飛び散っているを見つけました。それで、友達といっしょに拾っていたら、近くに住んでいた人が手伝ってくれました。拾い終わった後は、とても気分がよかったです。このようにボランティアは、人のためにもなるし自分のためにもなります。だから、これからも、ボランティアを続けたいと思います。

<ぼくがボランティアをはじめたきっかけとやってよかったこと 根雨小5年 吉田智紀>

ばくがボランティアに初めて行ったのは、昨年九月でした。行くきっかけになったのは、いつもは光一さんと土曜日遊んでいたけど、光一くんが遊べなくて、なんでと聞くと「ボランティアに行くから」と言っていたので、次の月から行き始めました。行ってみて、いろいろなものを作るのが楽しいし、食べ物を作るのもたのしいし、運ぶ(届ける)のもたのしくて、くばった人にとってもよるこばれるのがうれしいからもっとつづけたいです。たまにはけんどうの試合やしけんや練習で行けないこともあるけど、本当は、もっともっと休まずに行きたいです。たま - にプレゼントするものを運んでいるときに車によってしまうこともあるし、知っている人にくばる時はきんちょうしてしまいます。だけどこれからは毎月行ってがんばってやりたいです。

5名の子どもの声に代表されるように、ものづくりに内在する楽しさを体感していること、プレゼントを渡し、高齢者の近況などを緊張したり恥ずかしく感じながらも尋ねるとき、必ず高齢者から「ありがとう」と感謝や喜びの言葉を返されることに素直にうれしいと感じていること、異年齢集団であるボランティア仲間に出会えて友人を増やせたり、町内の空間認識を拡大させて楽しさを感じていること、近況の聞き取り内容に元気が出たり、逆に地域の課題に気づき始めて考えさせられたりすると言ひ、さらにはボランティアは人のためになるだけではなく自分のためにもなると言ひ、活動する自分自身を当事者として対象視する存在として成長し始めていること、がうかがえよう。

大概の場合、ボランティアに対して受け手側からの感謝や喜びの言葉が寄せられて「ボランティア活動をして良かった」「喜ばれてうれしい」と感じる。それは素直な感情であり、ボランティア活動初心者の場合には強く感じるものである。何も否定されることではない。しかし、後述するように、この認識段階で留まるものではないのも事実である。で指摘した「対象視する自己認識」の萌芽こそが次の段階に迫るものである。その意味で、子どもたちは僅か一年間の取り組みで早くも自他認識を成長させ始めているのである。

私が遭遇した一場面も紹介しておこう。訪問した小学生3名に対してお礼としてお金を差し出そうとされた方がいた。金額は子どもたちの月額小遣い程度である。「私たちはボランティアですからもらうわけにはいきません」と子どもたちは丁重に断った。帰路の車の中で「本当は欲しかったなあ。でもボランティアだから我慢したよね。我慢した自分たちのこと褒めてあげよう、仲間の皆にも話そう」と自慢そうに話す子どもたちであった。ここにも当事者の自己と当事者を見つめるもう一人の自己の存在が確認できよう。

次に、届ける側の大人たちであるが、先述した通り、震災以前は町内に散在していた各種サークル団体(配食サービスなどでボランティア活動をしている団体も含む)が、「ひのぼらねっと」誕生月プレゼント企画によって合流し、プレゼント作りという意味での共通の目的の下で持ち味を活かして活動し合える関係になった。その中でも異色なのは坂出清子氏のケースである。坂出氏は日野町社会福祉協議会副会長でもあり「明るい食生活黒坂グループ」のリーダー的存在でもあり、地震被災者でもある。

独居生活していた母屋が傾き、隣家に寄りかかる状態の中、解体更地化した隣地にプレハブ住宅を仮設し、引っ越し業者に依頼して荷物をプレハブ住宅に移動した。母屋の修復後、災害ボランティアセンターへ母屋への引っ越し作業を依頼した。渡辺大吉氏、田賀栄一氏と私が担当した。丸一日の苛酷な作業(図書を中心に重量のある荷物が多く、翌日以降の疲労感を経験したことが無いほど

のものであった）だったが、その模様を「地震に負けるなーボランティア奮闘記47」（朝日新聞鳥取版2002年10月17日）は次のように書いている。

「家屋が大きな被害を受けた黒坂地区の坂出清子さん（72）は、改築による引っ越し作業をボランティアに頼んだ。荷物の移動には自分も立ち会い、日をかけて少しずつ整理をしていきたいと思っていたが、引っ越し業者に頼んだ場合、これはかなわない。そこでボランティアに手伝ってもらったのだ。『涙が出るほどありがたかった』という坂出さんはお茶や昼食でボランティアをねぎらった上で『世話になって本当に助かったから、今度は自分ができることをやって恩返しをしたい』と考え、日野ボランティア・ネットワークに加わった。現在は得意な料理の腕を生かすなど、高齢者誕生月プレゼントなどの企画に積極的に参加している。」

同様な事情、動機、考えから参加しているのが生田清子氏である。生田氏はフラワーアレンジメント作り、坂出氏は料理作りと、それぞれの得意な技・持ち味を活かしたボランティア活動を継続している。

「ボランティア奮闘記」記事は次のように書いている。「ボランティアをしてもらった相手に相応のお返しをするのではなく、今度は他の人に対して自分ができることをする。『恩返し』を次の善意につなげる動きは、ボランティアに助けてもらった高齢者が、近所に住む足が不自由な高齢者の分まで買い物を引き受け始めるなど、様々な場面で見られるようになってきた」と。

地元の教員はどうか、前出の山垣氏や森田順子氏夫妻（順子氏は元教員、日野町おしどり観察小屋を管理・運営するボランティアを継続中、夫の勝彦氏も元教員、震災で各家から運び出された民具類の整理・登録するボランティアを継続中）、鳥居敏子氏（当時・黒坂小教員 現・黒坂小校長）、久城達也氏（当時・黒坂小教員）など紹介したい方々も多いが、ここでは「ボランティアの声」（『ひのぼらねっと通信VOL.16』2003年9月発行、傍点は筆者）に掲載された妹尾庸子氏（当時・根雨小教員）の一文を紹介しよう。

「『車を出す方が足りないのですが、先生、あいていませんか』。保護者の方から誘っていただいたのがきっかけで、ひのぼらねっとのボランティア活動に参加させていただいています。今年の2月から月に一度、小中学生と一緒に、お年寄りに誕生月プレゼントとカードを届けています。お年寄りのお宅に何うと、『自分の誕生日なんか忘れとったわ』そう言って、大喜びしてくださる人もあれば、『おじょうちゃん、これあげるわ』と涙を流しながら、小学生にあめを握らせる方もおられます。どのお年寄りの方にも温かく迎えていただき、必要とされているのが嬉しくて、来月もまた行きたいなあと、大人の私でも思います。子どもたちも、きっとそうでしょう。『小さいときにボランティアの活動をすることはいいことね。来てくれて、ありがとうね』。小中学生の顔を見て、お年寄りの方が、よくこう言われます。人は、十歳前後に生き方、基本的な信念が固まるそうです。『自分は人のために何かできる力がある』『まわりの人と助け合って生きていこう』、そんな信念が育ってくれるといいな・・・と常々思っている私にとって、子ども達のおっかなびつくりの気持ちをやさしく受けとめてくださるお年寄りの方に出会うたびに、『ありがとう』を言うてくださってありがとうございますと、心の中で、お礼をいいたくなります。」

喜ばれ、お礼の言葉をかけられて満足感に浸る段階から、ボランティア活動をする自分を冷静に見つめ始める段階に至ると、妹尾氏も言うように、待ち望まれる自分が、「必要とされる自分」が嬉しくなり、そのような機会を提供してくれる相手に対して自分のほうがむしろお礼を述べたいこ

とに気づき始める。大人である妹尾氏は早くもこの段階に至っていよう。

青年はどうか。ここでは「ボランティアの声」(「ひのぼらねっと通信VOL.13」2003年1月発行、傍点は筆者)に掲載された入沢真人氏(日野町職員)と、「ひの災害ボラセンこれまでとこれから(6)〈ボランティアコーディネート〉」(「ひのぼらねっと通信VOL.11」2002年7/8月号、傍点は筆者)に掲載された徳山智美氏(災害ボランティアセンター元職員)の一文を紹介しよう。

「私がボランティア活動を始めて約二年が経ちました。はじめは、文化ホールのコンサートのボランティアスタッフおして。そしてボランティアセンターの震災ボランティア活動などを経て、現在はひのぼらねっとの一員として活動しています。当初は、『人が足りないから』と頼まれたり、青年団の一員としてただなんとなく活動している、というような感じでしたが、それからだんだんとハマっていったというか(笑)、自分でも意識して活動するようになったと思います。それはなぜか。公務員としての自分を離れ、一町民として活動に参加していることで、デスクワークの中では聞くことのできないような町民の生の声(中には厳しい行政批判もあります)を聞くことができ、また、自分でも行政のいたらない点に気づかされたりするからかもしれません。特に、高齢者プレゼント企画のとき、独居の高齢者の方の姿を見るたびに、何かできることはないかと胸が痛みます。行政にはできない地域に密着した活動がこれからもできればと思っています。」

入沢氏は公務員としての自分、青年団の一員としての自分、一町民としての自分=「ひのぼらねっと」の一員としての自分、と複眼的な眼で自己を見つめ、地域と行政の隙間を埋める活動にボランティア活動の意義を見出している。ここでも自己を対象視する力が大きく作用していると言えよう。

徳山氏はつぎのように言う。「地震発生後の11月7日より、災害ボランティアセンターの臨時職員として3人が入ることになった。そして主に『ボランティア・コーディネーター』としての仕事を任された。ボランティア・コーディネーターとは、ボランティアの人たちに依頼を受けた所へ行ってもらうための、ボランティアと依頼者との間をつなぐ『橋』のような存在である。ボラセンでは『災害後の修繕作業』と『聞き取り調査』の2つのコーディネートを経験することになった。11月中旬から12月中旬にかけて、シート張りの依頼が殺到した。あまりの依頼の多さにどの家から始めていけばよいのか、センターは追い込まれていた。依頼を受けた順に作業をしていけないと問題になるだろうと思い、ミーティングで対策を練った。しかし実際に活動してみると、作業内容は依頼を受け付けたときに聞いたものと大きな違いがあり、現場を見て予定を組まないと、思うように作業が進まないことがわかった。そこで、修繕経験のあるボランティアの人が自ら事前調査に行くことを提案した。ボランティアの人数が揃わない日や悪天候の日など作業ができない日に、2、3人で依頼シートを手に1軒1軒丁寧に回ってくださった。そして調査をした結果により作業はスムーズに進み、センターもうまく回っていった。『依頼を受けた内容と現状とは違うものだ』と教えられたことで、コーディネーターの在り方について考えさせられるきっかけとなった。シート張りでの反省点を生かし、聞き取り調査では積極的にボランティアの一員として出向くことにした。するとボランティアにしか見えないその人との関わり方、ボランティアに行ったからこそできるアドバイスがあるのだと分かった。日野町のような小さい町では、これまでの活動によりコーディネーターがボランティアと住民との信頼関係や、ボランティアを根付かせることができる唯一の『掛け橋』になると思う」と。徳山氏は震災直後から下榎のボランティアセンターのテントに詰めて、被災住民からの救援依頼にてきばきと対応し、依頼シートとして張り出す作業をしてきた。この作業が一段落した直後に臨時職員としての勤務が始まり、ボランティア・コーディネーターとしての仕事

を任された。多くの依頼，悪天候，揃わない人数を前にして渡辺氏らベテランボランティアによる事前調査（下見）の必要性を見事に提案した。作業の段取りを行うことで，効率的な対応を可能にした。さらにはその経験を聞き取り調査活動にも応用し，ボランティアかつボランティア・コーディネーターとしての任を果たしたのである。

届けられる側の高齢者の方々の反応はどうか。当然ながら喜びの声を皆さんが上げている。「地震に負けるなーボランティア奮闘記」によれば、「贈り物を届ける各グループに子どもが含まれていることで訪問先の高齢者が和んで『何年生』『どこからきたの』話しかけるなど話が弾んでいる。訪ねてきた子どもが，高齢者の知り合いの孫であることが分かり，『こんなに大きくなったの』と目を細めるケースもあった。子どもの声を聞くだけで元気が出るという高齢者もいた。過疎・高齢化が進んだ日野町では，それほどまでに子どもの数が減っているのだ」「ぼた餅は好きだけど，もう自分ではよう作らん」「自分の誕生日も忘れとった。余計にうれしい」等々と。ある高齢者は後日，「いただいたぼた餅を近所の友達におすそ分けしたら『私のときは，何をもらえるだろう』と楽しみにしていました」とセンターに電話で伝えてくれた。

しかしながら，届ける側も安心ばかりしてはいられない。「訪問時にすぐに口にできる困りごとはよほどのことであり，実際の困りごとはそのときどきの生活場面で起こる」からである。「贈り物に添えるカードにセンターの電話番号を記し，すぐに連絡できるようにすることでカバーしようとしているが，電話をかけてくる例はまだ少ない。訪問や広報の機会を増やしていかなければならない」と奮闘記は書いている。この点では山田氏の精力的かつ丹念な訪問，ニーズ起こしは貴重である。

最後に町民意識全体に関わる変化の様子とプラス思考事例を紹介しよう。町民意識全体に関わる変化に関しては次の松田氏の一文が参考になろう。（ひの災害ボラセンこれまでとこれから（７）＜意識は変わったか＞「ひのぼらねっと通信VOL.13」2003年1月発行，傍点は筆者）

「ボランティアセンターの無かった日野町に災害ボラセンができ，さらにそれが社協のボランティアセンターとなり活動を続けて二年，町の人たちの意識は変わっただろうか？困っていてもボランティアに何か頼もうという土壌のなかった町，自分で何かボランティアをやってみようという人が多くなかった町に何か変化は現れただろうか？ひのぼらねっとで現在行っている『高齢者誕生月プレゼント企画』では，訪問先で困りごとなどを聞く。そのときボランティアセンターの電話番号を大きく書いたカードを渡しているのは，困ったときには誰かに頼めるんだよ，というメッセージでもある。人に迷惑をかけないことが美德とされている地域性では，例えばゴミ出し一つとってもなかなか頼みづらいことだ。分別の仕方が分からない，重いものを運べない……。そんな人にボランティアやセンター職員がゴミの出し方を教えたり，片づけを手伝った。そのような活動を続けるうち，少し変化が現れた。こんどは近所の人たちが早朝のゴミ出しを『手伝えるように』なってきたのだ。それまでは近所の人々が『やってあげますよ』と手伝おうとしても好意を受け入れることが気が引けて断っていたのである。そんな頼む側の垣根が少し低くなった。それが手伝う側を気軽に手伝えるようにさせた。うまくいく場合ばかりではないにしろ，こんな例があると先はそう暗くないと思えてくる。また，ボランティアを受けた人に『何かお礼をしたいが……』と言われたとき『自分にできるボランティアをやってみませんか？』と勧めてみると，その人だからできるボランティアが見つかったりする。『積極的に』とまではいかないまでも，『声を掛けられたら，

やってみてもいいかな?』くらいにはなっただろうか。ここまでくるには、応援してくれた多くの方々の熱意と、町にボランティアセンターができ、職員が配置され機能しているという事が大きい。この小さな花が大きく育つまでどんな水を撒けばいいのだろうか。まだまだやるべき事は多い。」

松田氏は高齢者、被災者をもボランティアになってもらう方向で会話を交わすと同時に、この輪をさらに拡大、発展させるためにはどのような仕掛けが必要かを自覚し、追求し始めているのである。

プラス思考事例としては山下氏の次の一文が好例である。<「宮城県北部連続地震」被災地へ経験伝える支援> (「ひのぼらねっと通信VOL.16」2003年9月発行、傍点は筆者)

「7月26日、宮城県北部を震源とした地震は、日に三度の震度6、そして県西部地震以来、国内で初めて震度6強を記録した。私たちはHPなどから、地元の新聞社や社協・行政などが発信する情報を集めた。被災地は高齢化が進んだ農村地域で、被災状況は、日野町を思わせるものだった。日野町内のあちらこちらで、被災地を心配する声が聞かれた。(中略)『経験した者が伝えないといけないのではないか』。私たちは、災害救援ボランティアセンターの活動が始まっていた南郷町の社協と連絡をとり、都合がついた4人で、運営スタッフ、あるいはボランティアとして、支援に向かうことを決めた。(中略)その後、スタッフとして運営を手伝いながら、被災地の状況を踏まえて、南郷町社協会長、支援に来ていた町外社協職員、ボランティアといった人たちに、復興への長い道のりとその間の住民支援や精神的なケアの必要性、他の被災町との連携の必要性、そして災害を負の遺産に留めないために、災害をチャンスと捉え、町内での新たな動きや町外ボランティアとのつながりを生かしてまちづくりに取り組むことが重要、といった提言をしてきた。そして日野で確立したシート張りのノウハウを伝えた。県内外NGOの支援も受けてスムーズなセンター運営をしていた南郷町でも、こういった話はあまり出ていないようだった。『経験を次の被災地に伝えること』は経験した者にしかできない、よりよい震災復興を進めるためには必要なことだ、と改めて実感する活動となった。」

山下氏も松田氏と同様に「ひのぼらねっとの高齢者誕生月プレゼント企画でも、『する/される』ではなく、関わりの中で何を生んでいくかが益々大切になってきている」(「ひのぼらねっと通信VOL.14」2003年3月発行、傍点は筆者)と、次の段階を見据え始めている。

7. 自他認識の三段階

子ども達、青年、大人、高齢者それぞれのボランティアに対する、あるいはボランティア活動に対する意識変化・発展、自他認識の変化・発展を述べてきたが、筆者自身のそれをも加味したとき、次の三段階があるように思われる。

第一段階は、する側・される側という自他認識にもとづき、ともに「嬉しい」「良かった」という素直な感情を抱く段階である。第二段階は、する側が「出番をいただきありがとう」と感じる段階である。そこにはする側・される側という自他認識がいまだに存在しながらも、する側の自己を冷静に対象視するいま一人の自分が存在する段階と言えよう。

第三段階は、する側・される側という自他認識から互いに何時でも交替する可能性がある自他であるとの認識段階である。この段階に至り、地域住民や地域外住民が対等・平等の人的ネットワークを結ぶことになろう。ひのぼらねっとの代表であり、菅福元気邑の代表でもある小谷博徳氏は

ログで次のように述べている。（菅福元気邑「さとやま物語」2006,03,11）

「月一回71歳以上の高齢所帯，独居世帯の誕生日にプレゼントを届けている。3月生まれのお年寄り60世帯に今日子どもたちとともに大山おこわを届けた。自分の誕生日を忘れていいながらも，满面笑みの喜びにふれると，すごいことをしているという感情を覚える。直接手渡す小・中・高校生も同じ感情と感動を心に刻んでいると思う。こんなに喜ばれる姿を，感動という形でいただくことが出来る。これぞボランティアの神髄と私は考える。利己的な生き方が主流の今世に，なんと明るいなんと素晴らしいなんと暖かい生き方ではないか。させられる，から，やってみよう。心の持ち方一つでこんなにも社会を明るく出来る仕事の一端を担っていることを誇りに思いたい。今日も41名のボランティアの皆さんの心を届けることが出来た。素晴らしい町づくりかな。」

8. 「災害ボラ」6年目，「ひのぼらねっと」5年目を迎えた新たな課題

「ひのぼらねっと」に参集する成人ボランティアたち，とりわけ裏方で運営に携わる者たちは，今，自他認識第三段階に到達した。また，子どもたちは数年間の活動の中で第一段階から第二段階へと個体発生的に成長している。

ところで，子どもたちの場合は毎年新たな参加者が有り，高校卒業段階で一旦は「ひのぼらねっと」を巣立っていく訳であり，自他認識の発展という意味では繰り返し模様であるが，成人ボランティアの場合はそこに留まる訳にはいかない。例えば高齢者誕生日プレゼント企画等を漫然と継続していれば良いと考えている訳ではない。地域づくりの新たな人的ネットワークの構築や新企画を模索している。その辺りを町を取り巻く最新状況を踏まえてデッサンしてみよう。（鳥取大学地域学部地域教育学科・鳥取大学生涯教育総合センター2005年度科研＜基盤研究B 課題番号17330167 地域の教育福祉諸機関の連携に関する総合的研究＞中間報告より一部抜粋。）

2006年2月19日，日野町長選挙が行われ，圧倒的な票差をもって新町長が選出された。この結果をどう見るかは意見の分かれるところであるが，「財政再建団体」に陥る寸前にある日野町で，箱物行政と批判されるこれまでの施策に対して町民の多くが厳しい判断を下したとする見解が有力視されている。（注4）景山町長は早速，徹底した情報公開や給与削減などを表明し，新年度予算を成立させた。日野町ボランティアセンター臨時職員に関しては，一部に職務内容の変更はあるが，当面，引き続き1名の臨時職員の雇用が実現した。それ以上に大きな動きは，鳥取県からの打診である。県防災危機管理課からひのぼらねっとに対して以下のような事業委託の打診があった。日野町根雨に鳥取県西部地震資料展示室を開設しスタッフを配置する，災害ボランティア研修を企画・運営する，県周年震災関連事業を企画・運営する，2010年までは継続事業とする，という内容である。

早速，山下弘彦氏が中心になり企画書を提出した。県の意向を正面から受け止めることは当然として，それに加えてひのぼらねっと側の地域づくり構想も実現しようと考えている。仮称ではあるが「町民活動センター」構想を立ち上げようという訳である。町民による地域づくりのサロンのな場であり，ひのぼらねっと高齢者誕生日プレゼント企画に参集する各サークルの意識を一層高めるための拠点を確保しようとの認識である。それと言うのも，高齢者誕生日プレゼント企画を支える各サークル間の相互ネットワークの内実や，先の町長選挙結果も，クールに捉えるならば良質ではあるが未だ個別的・部分的なレベルに留まり，地域づくり認識も十分とは言えないと思われるか

らである。互いの持ち味をいかにして新たな日野づくりに結集・収斂させるかが今問われている。その自覚はひのぼらねっと事務局員の間で確実に広がっている。

以上、日野町災害ボランティアセンターとひのぼらねっとの5年間の歩みを分析、紹介してきたが、新たな教育原理と求められるキー・パーソン像に関しては次回以後の報告に委ねたいと思う。

それと言うのも、山下弘彦氏を始めとした幾人かの思索と足跡をさらに丁寧に追わなければならないと認識しているからである。関西学院大学災害復興制度研究所等のフォーラムに参加し、全国各地での地域づくりの取り組み状況を知るにつけて感じることの一つは、必ずアイディアに富み、行動力豊かなリーダーが存在するという点である。リーダー的存在の分析を深めることが新たな教育原理や求められるキー・パーソン像の解明に必要不可欠であろう。(注5) そのことを付言して稿を閉じたい。

<注>

1. 前稿では日野ボラネットの立ち上げを地震の1年後と記したが、正確には半年後であった。訂正する。本稿で使用する主な資料は以下のものである。

鳥取県 『鳥取県西部地震～被災から復興へ～』平成12年11月

鳥取県NPO・ボランティアフォーラム実行委員会/鳥取県 『鳥取県NPO・ボランティアフォーラム報告書』平成13年2月

米子震災フォーラム事務局 『米子震災フォーラム事務局～鳥取県西部地震の教訓を活かして～報告書』平成13年3月

鳥取県立根雨高等学校 『2000年10月6日発生鳥取県西部地震 根雨高校の記録』平成13年3月

鳥取県立精神保健福祉センター所長原田豊 『2000年鳥取県西部地震～保健相談活動とメンタルヘルス～』平成13年10月

平成13年夏自由研究 境小学校4年梅組松本崇 『鳥取県西部地震について』

鳥取県 『平成12年鳥取県西部地震震災体験記録』平成13年10月

鳥取県 『平成12年鳥取県西部地震の記録』平成13年10月

鳥取県社会福祉協議会ボランティアセンター 『「鳥取県西部地震」災害ボランティア活動の概要』平成13年11月

日野町議会活動編・日野町震災シンポジウム編 『鳥取県西部地震 日野町の災害・復興への記録』平成14年3月

鳥取県西部地震復興本部 『「鳥取県西部地震」を考える鳥取県民大会～西部地震を乗り越えて～報告書』平成14年3月

同上 『「鳥取県西部地震」2周年県民大会～住み続けたいまちづくり～報告書』平成15年3月

井上厚史・山下弘彦 「連載・地震に負けるな ボランティア奮闘記」朝日新聞をはじめ新聞各紙の記事

日野町災害ボランティアセンター 『ききとりニーズ調査報告書』2001年4月6日

日野ボランティア・ネットワーク 『高齢者誕生祝い企画(案)』2002/03/09

日野ボランティア・ネットワーク 『ひのぼらねっと通信 VOL.1～VOL.16』2001年/5月～2003年/

9月

日野ボランティア・ネットワーク『ひのぼらねっと通信特別号 誕生日お祝いとんとん倶楽部 VOL.1～VOL.18』2001年/5月～2003年/9月

日野ボランティア・ネットワーク『中山間地を大地震が襲った！わたしたちのボランティア活動 2000年10月～2003年10月鳥取県西部地震体験文集』2005年10月

日野ボランティア・ネットワーク『もし、中山間地で大地震が起こったら・・・鳥取県西部地震・ボランティア活動の実践記録～』2005年10月

- 2．小原友行広島大学大学院教育学研究科教授は「生涯学習としての新しい社会認識教育」（社会認識教育学会編『社会科教育のニュー・パースペクティブ』2003年3月，明治図書）において，生涯学習としての社会認識教育実践開発の方向性として次の3点を指摘している。（1）主体的な自己学習を可能にするような，問題発見型の学習の開発，（2）社会認識の質が高まっていくようなものになるような開発（3）学習者が学習過程や思考過程を意識した開発，である。筆者は後述するように（2）を（1）（3）等により実現する方向性を意識している。
- 3．災害ボランティアセンターとして正式な受け付けによる作業は2002年11月30日をもって終了した。その日，渡辺氏・山下氏・山田氏・小山の4名が最後の屋根ブルーシート補修作業を行った。
- 4．日野町の財政状況については藤田安一氏「現代地方財政の破綻と再建 鳥取県日野町を素材にして」（鳥取大学地域学部紀要第2巻第3号平成18年3月）が詳しい。
- 5．山下氏には2005年度，2006年度の地域学部必修授業「地域学入門」の講師もお願いしている。氏は，今や全国レベルでの地域づくりコーディネータとして活躍されている。その「急成長」ぶりは分析に値しよう。また，地域づくりに思索・行動力豊かなリーダー的存在が必要不可欠であることは各地の社会福祉協議会の取り組み等にも認められよう。

（2006年5月9日受付，2006年5月11日受理）